

● 平成 31 年度推薦入試 I についての講評

1 小論文

(1) 方法

本年度の小論文課題では、宮崎県を訪れた観光客に関する 3 つの資料（観光客の居住地別割合の推移、外国人宿泊客数の推移、観光地に対する満足度）を提示し、受験生には、これらのデータを踏まえて、もしあなたが県知事という立場であると仮定した場合、どのような取り組みを行うかが問われた。

この課題は、宮崎県への観光客誘致という実際的な問題を当事者視点で考えてもらうことで、地域の課題の探究と解決に主体的に取り組む姿勢を持っているか、外国人の訪問を見越した課題や建設的な取り組みを考えてもらうことで異文化に対する理解力や対応力の習得に意欲を持っているか、提示されたデータを適切に読み取る分析的な視点を持ち、読み取った内容を根拠として自分の主張を論理的に表現する文章力を持っているか、といった観点から、受験生に本学のアドミッションポリシーに従った十分な学力（態度・意欲、思考力、判断力、表現力）が備わっているかどうかを確認することを目的に出題された。

(2) 結果に関する講評

評価のポイントは、①課題文で提示された 3 つの資料におけるデータを的確に把握し、読み取った内容をもとに自分の主張を展開しているかどうか、②主張に具体性や現実性があり、論理的な展開となっているかどうか、③論点が明確かつ的を絞ったものとなっており、終始一貫した論の展開となっているかどうか、であった。

そのため、自分の主観的な思いや考えのみで書かれているなど提示された資料を活用できていない、または単に量の増減を述べるだけのよう読み取りが表面的であるもの、資料から読み取った内容と自分の主張との間に関連が見いだせないもの、国際交流を過度に強調するだけのありきたりな考察に終始するもの、主張内容が具体的でない、または現実性に乏しいもの、短い主張を単発的に述べ、論の焦点が絞れていないもの、などは低い評価となった。また、極端に字数が少ないもの、判読困難なほどの乱筆、誤字脱字が多いもの、など文章の基本が守られていないものも低い評価となった。

一方、主張が明確で論理的な展開となっているなど基本的な文章力の高さに加えて、自分の主張が課題文で提示されたデータのどの部分に基づいているかが明確なもの、実現可能性が高いと思わせる具体的な記述や自分なりのオリジナルな視点があるもの、などについては高い評価となった。

2 グループ面接

(1) 方法

本年度のグループ面接では、近年、マスコミ等によく取り上げられ、高校生にとっても身近な問題である「部活動問題」を題材に、そのあり方について、問題のある部分（教師の過重労働など）と教育的な効果が認められる部分をあげ、生徒・保護者・教師・地域住民など様々な人々の視点から現状の部活動のメリットまたはデメリットの対立軸のいずれかの立場に立って議論し、グループでの結論をまとめることが求められた。なお、当日のグループ面接がスムーズに進行できるよう、ある程度の知識や考え方の方向性については準備しておいてもらうことを目的に、受験生には、課題に関連する4つのキーワード（学校教育、運動習慣、教師の長時間労働、スポーツ庁）が、事前に示されていた。

(2) 結果に関する講評

評価する観点は、①表現する力（身近な問題に対して当事者意識を持って主体的に考えつつ、自分の意見を論理的かつ的確にまとめ、それを口頭で適切に表現できているかどうか）、②面接の態度（自分の意見を積極的に表明しようとする意欲があり、他者の意見・主張の内容をよく理解し、議論を発展させようとする態度がみられるかどうか）、③適性（課題に対して1つの視点からだけでなく、様々な立場の視点を考慮に入れた多角的で論理的な思考ができているかどうか）の3つの観点であり、受験生に本学のアドミッションポリシーに従った学力（態度・意欲、思考力、判断力、表現力）と他者と協働する力等のコミュニケーション力が十分に備わっているかどうかを問われた。

グループ面接の結果、キーワードの内容を的確に把握し、課題に沿った主張を展開させている受験生、課題に対して多様な立場からメリット・デメリットを考え、自分がどの立場で発言しているのかを明示できていた受験生、自分の主張を何らかの根拠に基づいて論理的に説明できていた受験生、自分の意見を積極的に発言し、議論をリードしつつも他者の意見に対する配慮もみられた受験生、他者の意見を踏まえて異なる視点から議論の発展を試みようとする態度がみられた受験生、自分の経験や環境を活かした独自性がある意見を述べた受験生、などは高く評価された。

一方で、キーワードの理解が不十分でその場での思いつきと思われる主張を述べた受験生、論点を正確に把握できていないことで意見が言えない、または議論と関係のない話をしてしまった受験生、主張の根拠が不十分で主観的な意見に固執した受験生、他者への安易な同意が多いなど議論に対して消極的な態度がみられた受験生、主張を簡潔にまとめることができず話が冗長になるなど時間がうまく使えなかった受験生、などは低い評価となった。

3 個人面接

(1) 方法

1人約20分で面接を行った。評価の基準は次の3点であった。

① 表現する力

自己推薦書やアピール・ポイントの内容をわかりやすく表現しているか。

自分の考えを面接員の質問に応じて理解しやすい形で表現しているか。

② 面接の態度

相手の発言を真摯にきく態度であるか。

対話に参加しようとする姿勢であるか。

③ 適性或意欲

入学への真の意欲があるか。

「大学案内」などによってカリキュラムの内容を理解しているか。

(2) 結果に関する講評

上記の3つの基準を踏まえて評価をした。その結果、面接員のコメントは下記のようなものであった。

① 「表現する力」に関するコメント

アピール・ポイントや自分の良さについて自分の言葉を使って表現した生徒には高い評価が与えられた。また、将来の目標について明確なビジョンを持っている生徒も多かった。将来のビジョンと本学での学びについて一貫性かつ具体性のある説明が出来る生徒には高い評価となったが、そうでない生徒には低い評価となる場合が多かった。受験生には、表層的な理解だけでなく、自分の将来のビジョンと関連して具体性のある表現を期待する。

② 「面接の態度」に関するコメント

多少緊張して受け答えがぎこちなくても、真摯な態度で対応すれば低い評価とはならない。落ち着いて、丁寧に受け答えるとともに、変則的な質問がなされても臨機応変な対応ができれば高い評価となる。

③ 「適性或意欲」に関するコメント

何よりも、本学へ入学したいという意欲が感じられることが重要であるが、それに見合うだけの本学の理解も求められる。アドミッション・ポリシー、カリキュラム、学びの特色(リベラル・アーツ教育など)について、また、学びたい科目やゼミ、教養課程(グローバル人材養成プログラムと現代教養科目群)と専門課程(言語・文化、メディア・コミュニケーション、国際政治経済という3専攻)などの理解は不可欠である。その知識不足が露呈するようでは、決して高い評価を受けられない。しかし、これらは暗記するだけの知識となつてはならず、これを十分理解した上で、自分の将来のビジョンにどう繋げるかについて表現できる受験生には高い評価が与えられた。